

『玉勝間』の巻頭言に関する考察（前編）

はじめに

『玉勝間』（全十四巻）は江戸時代中期に活躍した国学者、本居宣長の随筆集である。書名の『玉勝間』は細かく編まれた綺麗な竹籠という意味である。宣長の『古事記伝』巻十七にも「无間勝間^{マナシカツマ}は麻那志加都麻^{マナシカツマ}と訓べし、无間^{マナシ}は、書紀に無目と作る意なり、加都麻^{カツマ}は、堅津間の約まりたるにて、書紀には即ち堅間^{カタマ}とあり、こは籠^コの、編る竹と竹との間ダの堅く密りて、目の無きを云り、万葉十二に、玉勝間^{タマカツマ}とあるも、此ノ物なり。」とある。

『玉勝間』の各巻の巻頭には草花に因んだ巻名が掲げられている。その巻名を巻ごとに記すと、巻一「初若菜」、巻二「桜の落葉」、巻三「たちばな」、巻四「わすれ草」、巻五「枯野のすゝき」、巻六「からある」、巻七「ふちなみ」、巻八「萩の下葉」、巻九「花の雪」、巻十「山菅」、巻十一「さねかづら」、巻十二「山ぶき」、巻十三「お

もひ草」、巻十四「つらく椿」である。綺麗に編まれた竹籠（玉勝間）がこれらの花々で飾られている、といった趣向である。

宣長は各巻の巻名の直後に、その巻名を詠み込んだ和歌一首に文章を添えて一篇と成したものを置いている。本稿ではこれを仮に巻頭言と称する。宣長は『玉勝間』巻十の巻頭言で、自らの巻頭言に關して次のように述べている。

山菅 十

はてもなしいふべきことはいへど／＼なほやますげのみだ
れあひつ、

此野べのすさびよ、いとかくはかなき手ならひを、もの／＼しく、巻ごとになつて、哥をさへにそへたるは、我ながらだに、あやしくおぼゆるを、おのづからも見む人は、ましていかにことごとしと思ふらん、さるははじめの巻のはしに、ゆくりかに哥ひとつ物して、巻の名つけつるままに、つぎ／＼も一つ二つ

膽^(*) 吹 覚

しかせしが、おのづからならひになりて、かならずさらではえあらぬわざのごとなりもてきぬるを、今さらにたがへむも、さすがにて、例のごと物するになむ、そもそのをりく、思ひうるまゝに、よみいでしも、あるは他事によりたるがあるをも、とりいなどするを、につかはしくおぼゆるも、なきをりなど、今か、むとすとは、筆とりながら、思ひめぐらすに、例の口おそさは、とみにもいでこで、しりくはへがちなるも、あぢきなく物ぐるほしきわざになん、此山菅も、からうじてほりいでたる、さる哥のきたなげさよ、

宣長が右の文章で「ものくしく、巻ごとになつて、哥をさへにそへたるは、我ながらだに、あやしくおぼゆるを、おのづからも見む人は、ましていかにことごとしと思ふらん」と記している通り、近世の随筆集で巻ごとに草花に因んだ巻名を付け、更にその巻名を詠み込んだ和歌までも添えたものを、私は寡聞にして知らない。それは随筆集としての『玉勝間』の特徴の一つといつてよいであろう。しかし、これまでの『玉勝間』研究では、この巻頭言に着目して考察したものはないようである。そこで本稿では、『玉勝間』の特徴の一つでありながら、これまでほぼ等閑視されてきた『玉勝間』の巻頭言を取り上げて、その巻名とそれに添えられた和歌を中心に考察してみたい。ただし、全十四巻の巻頭言の考察を一括して掲載することは紙面の都合上不可能であるので、本稿ではその前半部にあたる巻一「初若菜」から巻七「ふちなみ」に関する考察を述べる。

1 巻一「初若菜」

宣長は『玉勝間』巻一の冒頭で、この随筆集全体に冠するかたちで、「玉勝間」という書名を詠み込んだ和歌一首を置いている。それは――。

言草のすゞろにたまる玉がつまつみてこゝろを野べのすさびに一首の大意は、心の赴くままに書いてきたさまざまな文章が、気付かない間に綺麗な竹籠にいっぱいになりました、といったところであろう。この「言草の」の和歌の直後に巻一の巻頭言、「初若菜」が置かれている。

初若菜 一

此言草よ、なにくれと数おほくつもりぬるを、いとくだくしけれど、やりすてむもさすがにて、かきあつめむとするを、けふはむ月十八日、子ノ日なれば、よし有ておぼゆるまゝに、まづこの巻の名、かく物しつ、次々のも、又そのをりく思ひやらんまゝに、何ともかともつけてむとす。

かたみとはのこれ野さはの水ぐきの浅くみぢかきわかな、
りとも

宣長は巻一の巻名を「初若菜」と名付けた。彼はその理由について、この一篇を起稿した日が「む月十八日、子ノ日なれば、よし有ておぼゆるまゝに」、その巻名としたと記している。「子ノ日」とは

正月初子（最初の子の日）の日のこと。平安時代、この日に野に出て小松を引き、若菜を摘んで遊び、宴を設けた。巻名の「初若菜」とはすなわち、子の日に摘まれる若菜のことである。宣長は『玉勝間』巻一の巻頭言に於いて、自らの随筆集を寿ぐ意味も込めて、その巻名を「初若菜」と名付けたのであろう。この「む月十八日、子ノ日なれば」という記事から、「初若菜」を執筆した時期が寛政四年（一七九二）か翌五年（一七九三）であることが推定される。寛政四年は、宣長は六十三歳である。

さて、この「初若菜」という巻名は、その巻頭言だけで完結するものではなく、それに先行する「すゞろなる」の歌からもまた導き出されるものであることを述べておきたい。上述の如く書名の「玉勝間」とは綺麗な竹籠という意味である。そして、その書名を詠み込んだ「言草の」の一首には、「つみて」（摘む）、「野べ」（野辺）という言葉が使われている。すなわち、「玉勝間（竹籠）」―「言草」―「摘む」―「野辺」というイメージの繋がりが、そこには成立しているのである。「玉勝間（竹籠）」―「言草」―「摘む」―「野辺」というイメージの繋がりを踏まえて、それに続く言葉を考えるならば、それは自ら新春の「子の日」の若菜摘み、すなわち「初若菜」となるはずである。つまり、「言草の」の一首は前章で述べたとおりの歌意であるが、それとは別に新春の若菜摘みのイメージが重ねられているのである。宣長は巻一の巻頭言の書き出しを「此言草よ、なにくれと数おほくつもりぬるを」とする。これも明らかに「言草の」の一首を踏まえての書き出しである。宣長は『玉勝間』という

書名から巻一の巻頭言までを一繋がりのものでして、すなわち、「玉勝間（竹籠）」―「言草」―「摘む」―「野辺」―「初若菜」というイメージの繋がりを念頭に置いて書いたのではないかと考えられるのである。宣長は確かに「む月十八日、子ノ日なれば、よし有ておほゆるま、に、まづこの巻の名、かく物しつ」と記しているが、それが事実であれ虚構であれ、巻一の「初若菜」という巻名は、「玉勝間」という書名から始まる、「玉勝間（竹籠）」―「言草」―「摘む」―「野辺」―「初若菜」とイメージの連鎖の中に置くことで、その文学的趣向が見えてくる仕掛けになっているのである。

さて、巻一の巻頭言にある宣長の「かたみとは」の一首には「初若菜」という言葉は使われておらず、「わかな（若菜）」とだけある。巻名の「初若菜」の用例を『万葉集』並びに二十一代集から見出すことはできなかったが、『夫木和歌抄』に載る左の和歌一首にその用例を認めることができた。「初若菜」という言葉は、中古以前の和歌に於いては、ほとんど使われることがなかったようである。

文応元年基政家会、沢若菜

権僧正公朝

けふもつむ雪げのさはの初若菜明日よりこそ人ほしめらめ

〔夫木和歌抄〕巻一春部一、二二二

宣長の「かたみとは」の一首の大意は、春の野沢に咲く短い若菜のように小さなものであってもいいから、私が書いた随筆のいくらかでも形見として後世に残ってほしい、といったところであらう。ここでの「水ぐき」は一つ一つの随筆・文章のことで、これまで「言

草」としてきたものを「水ぐき」と言い換えたものである。宣長のこの歌のように「水ぐき」を「かたみ」と見ようとする歌は、『新古今和歌集』の次の一首に見られる。

かよひける女のはかなくなり侍りにけるころ、

かきおきたるふみども経のれうしになさむとて、

とりていでてみ侍りける

按察使応通

かきとむることのはのみぞみずくきのながれてとまるかたみなりける

（『新古今和歌集』巻八哀傷歌、八二六）

この歌の「みずぐき」は筆跡という意味であり、宣長の「かたみとは」の歌に使われた随筆・文章とは相違する。しかし、「水ぐき」を「かたみ」と見ようとする趣向は、二十一代集では右の「かきとむる」の一首のみであるから、宣長がこの歌を踏まえて「かたみとは」の一首を詠んだ可能性を考えてもよいのではないだろうか。

2 卷二「桜の落葉」

桜の落葉 二

なが月の十日ごろ、せんざいの桜の葉の、色こくなりたるが、^④
物がなしきゆふべの風に、ほろ／＼とおつるを見て、よめる、^⑤
花ちりし同じ梢をもみぢにも又ものおもふ庭ざくらかな
これもひろひいて、やがて巻のなとしつ、^⑥

九月十日ごろ、前栽の桜の葉で色が濃くなっているものが、物悲しい夕風に吹かれて、はらはらと落ちるのを見て「花ちりし」の歌を詠んだ。そして、この一首に因んで巻二を「桜の落葉」と名付けた、と宣長は記している。

この「桜の落葉」の文章の部分と北村季吟『枕草子春曙抄』の「風は」の一部分を比較すると、^④ ^⑤ ^⑥ ^⑦ ^⑧ ^⑨ ^⑩ ^⑪ ^⑫ ^⑬ ^⑭ ^⑮ ^⑯ ^⑰ ^⑱ ^⑲ ^⑳ ^㉑ ^㉒ ^㉓ ^㉔ ^㉕ ^㉖ ^㉗ ^㉘ ^㉙ ^㉚ ^㉛ ^㉜ ^㉝ ^㉞ ^㉟ ^㊱ ^㊲ ^㊳ ^㊴ ^㊵ ^㊶ ^㊷ ^㊸ ^㊹ ^㊺ ^㊻ ^㊼ ^㊽ ^㊾ ^㊿ [㏀] [㏁] [㏂] [㏃] [㏄] [㏅] [㏆] [㏇] [㏈] [㏉] [㏊] [㏋] [㏌] [㏍] [㏎] [㏏] [㏐] [㏑] [㏒] [㏓] [㏔] [㏕] [㏖] [㏗] [㏘] [㏙] [㏚] [㏛] [㏜] [㏝] [㏞] [㏟] [㏠] [㏡] [㏢] [㏣] [㏤] [㏥] [㏦] [㏧] [㏨] [㏩] [㏪] [㏫] [㏬] [㏭] [㏮] [㏯] [㏰] [㏱] [㏲] [㏳] [㏴] [㏵] [㏶] [㏷] [㏸] [㏹] [㏺] [㏻] [㏼] [㏽] [㏾] [㏿] ^㐀 ^㐁 ^㐂 ^㐃 ^㐄 ^㐅 ^㐆 ^㐇 ^㐈 ^㐉 ^㐊 ^㐋 ^㐌 ^㐍 ^㐎 ^㐏 ^㐐 ^㐑 ^㐒 ^㐓 ^㐔 ^㐕 ^㐖 ^㐗 ^㐘 ^㐙 ^㐚 ^㐛 ^㐜 ^㐝 ^㐞 ^㐟 ^㐠 ^㐡 ^㐢 ^㐣 ^㐤 ^㐥 ^㐦 ^㐧 ^㐨 ^㐩 ^㐪 ^㐫 ^㐬 ^㐭 ^㐮 ^㐯 ^㐰 ^㐱 ^㐲 ^㐳 ^㐴 ^㐵 ^㐶 ^㐷 ^㐸 ^㐹 ^㐺 ^㐻 ^㐼 ^㐽 ^㐾 ^㐿 ^㑀 ^㑁 ^㑂 ^㑃 ^㑄 ^㑅 ^㑆 ^㑇 ^㑈 ^㑉 ^㑊 ^㑋 ^㑌 ^㑍 ^㑎 ^㑏 ^㑐 ^㑑 ^㑒 ^㑓 ^㑔 ^㑕 ^㑖 ^㑗 ^㑘 ^㑙 ^㑚 ^㑛 ^㑜 ^㑝 ^㑞 ^㑟 ^㑠 ^㑡 ^㑢 ^㑣 ^㑤 ^㑥 ^㑦 ^㑧 ^㑨 ^㑩 ^㑪 ^㑫 ^㑬 ^㑭 ^㑮 ^㑯 ^㑰 ^㑱 ^㑲 ^㑳 ^㑴 ^㑵 ^㑶 ^㑷 ^㑸 ^㑹 ^㑺 ^㑻 ^㑼 ^㑽 ^㑾 ^㑿 ^㒀 ^㒁 ^㒂 ^㒃 ^㒄 ^㒅 ^㒆 ^㒇 ^㒈 ^㒉 ^㒊 ^㒋 ^㒌 ^㒍 ^㒎 ^㒏 ^㒐 ^㒑 ^㒒 ^㒓 ^㒔 ^㒕 ^㒖 ^㒗 ^㒘 ^㒙 ^㒚 ^㒛 ^㒜 ^㒝 ^㒞 ^㒟 ^㒠 ^㒡 ^㒢 ^㒣 ^㒤 ^㒥 ^㒦 ^㒧 ^㒨 ^㒩 ^㒪 ^㒫 ^㒬 ^㒭 ^㒮 ^㒯 ^㒰 ^㒱 ^㒲 ^㒳 ^㒴 ^㒵 ^㒶 ^㒷 ^㒸 ^㒹 ^㒺 ^㒻 ^㒼 ^㒽 ^㒾 ^㒿 ^㓀 ^㓁 ^㓂 ^㓃 ^㓄 ^㓅 ^㓆 ^㓇 ^㓈 ^㓉 ^㓊 ^㓋 ^㓌 ^㓍 ^㓎 ^㓏 ^㓐 ^㓑 ^㓒 ^㓓 ^㓔 ^㓕 ^㓖 ^㓗 ^㓘 ^㓙 ^㓚 ^㓛 ^㓜 ^㓝 ^㓞 ^㓟 ^㓠 ^㓡 ^㓢 ^㓣 ^㓤 ^㓥 ^㓦 ^㓧 ^㓨 ^㓩 ^㓪 ^㓫 ^㓬 ^㓭 ^㓮 ^㓯 ^㓰 ^㓱 ^㓲 ^㓳 ^㓴 ^㓵 ^㓶 ^㓷 ^㓸 ^㓹 ^㓺 ^㓻 ^㓼 ^㓽 ^㓾 ^㓿 ^㔀 ^㔁 ^㔂 ^㔃 ^㔄 ^㔅 ^㔆 ^㔇 ^㔈 ^㔉 ^㔊 ^㔋 ^㔌 ^㔍 ^㔎 ^㔏 ^㔐 ^㔑 ^㔒 ^㔓 ^㔔 ^㔕 ^㔖 ^㔗 ^㔘 ^㔙 ^㔚 ^㔛 ^㔜 ^㔝 ^㔞 ^㔟 ^㔠 ^㔡 ^㔢 ^㔣 ^㔤 ^㔥 ^㔦 ^㔧 ^㔨 ^㔩 ^㔪 ^㔫 ^㔬 ^㔭 ^㔮 ^㔯 ^㔰 ^㔱 ^㔲 ^㔳 ^㔴 ^㔵 ^㔶 ^㔷 ^㔸 ^㔹 ^㔺 ^㔻 ^㔼 ^㔽 ^㔾 ^㔿 ^㕀 ^㕁 ^㕂 ^㕃 ^㕄 ^㕅 ^㕆 ^㕇 ^㕈 ^㕉 ^㕊 ^㕋 ^㕌 ^㕍 ^㕎 ^㕏 ^㕐 ^㕑 ^㕒 ^㕓 ^㕔 ^㕕 ^㕖 ^㕗 ^㕘 ^㕙 ^㕚 ^㕛 ^㕜 ^㕝 ^㕞 ^㕟 ^㕠 ^㕡 ^㕢 ^㕣 ^㕤 ^㕥 ^㕦 ^㕧 ^㕨 ^㕩 ^㕪 ^㕫 ^㕬 ^㕭 ^㕮 ^㕯 ^㕰 ^㕱 ^㕲 ^㕳 ^㕴 ^㕵 ^㕶 ^㕷 ^㕸 ^㕹 ^㕺 ^㕻 ^㕼 ^㕽 ^㕾 ^㕿 ^㖀 ^㖁 ^㖂 ^㖃 ^㖄 ^㖅 ^㖆 ^㖇 ^㖈 ^㖉 ^㖊 ^㖋 ^㖌 ^㖍 ^㖎 ^㖏 ^㖐 ^㖑 ^㖒 ^㖓 ^㖔 ^㖕 ^㖖 ^㖗 ^㖘 ^㖙 ^㖚 ^㖛 ^㖜 ^㖝 ^㖞 ^㖟 ^㖠 ^㖡 ^㖢 ^㖣 ^㖤 ^㖥 ^㖦 ^㖧 ^㖨 ^㖩 ^㖪 ^㖫 ^㖬 ^㖭 ^㖮 ^㖯 ^㖰 ^㖱 ^㖲 ^㖳 ^㖴 ^㖵 ^㖶 ^㖷 ^㖸 ^㖹 ^㖺 ^㖻 ^㖼 ^㖽 ^㖾 ^㖿 ^㗀 ^㗁 ^㗂 ^㗃 ^㗄 ^㗅 ^㗆 ^㗇 ^㗈 ^㗉 ^㗊 ^㗋 ^㗌 ^㗍 ^㗎 ^㗏 ^㗐 ^㗑 ^㗒 ^㗓 ^㗔 ^㗕 ^㗖 ^㗗 ^㗘 ^㗙 ^㗚 ^㗛 ^㗜 ^㗝 ^㗞 ^㗟 ^㗠 ^㗡 ^㗢 ^㗣 ^㗤 ^㗥 ^㗦 ^㗧 ^㗨 ^㗩 ^㗪 ^㗫 ^㗬 ^㗭 ^㗮 ^㗯 ^㗰 ^㗱 ^㗲 ^㗳 ^㗴 ^㗵 ^㗶 ^㗷 ^㗸 ^㗹 ^㗺 ^㗻 ^㗼 ^㗽 ^㗾 ^㗿 ^㘀 ^㘁 ^㘂 ^㘃 ^㘄 ^㘅 ^㘆 ^㘇 ^㘈 ^㘉 ^㘊 ^㘋 ^㘌 ^㘍 ^㘎 ^㘏 ^㘐 ^㘑 ^㘒 ^㘓 ^㘔 ^㘕 ^㘖 ^㘗 ^㘘 ^㘙 ^㘚 ^㘛 ^㘜 ^㘝 ^㘞 ^㘟 ^㘠 ^㘡 ^㘢 ^㘣 ^㘤 ^㘥 ^㘦 ^㘧 ^㘨 ^㘩 ^㘪 ^㘫 ^㘬 ^㘭 ^㘮 ^㘯 ^㘰 ^㘱 ^㘲 ^㘳 ^㘴 ^㘵 ^㘶 ^㘷 ^㘸 ^㘹 ^㘺 ^㘻 ^㘼 ^㘽 ^㘾 ^㘿 ^㙀 ^㙁 ^㙂 ^㙃 ^㙄 ^㙅 ^㙆 ^㙇 ^㙈 ^㙉 ^㙊 ^㙋 ^㙌 ^㙍 ^㙎 ^㙏 ^㙐 ^㙑 ^㙒 ^㙓 ^㙔 ^㙕 ^㙖 ^㙗 ^㙘 ^㙙 ^㙚 ^㙛 ^㙜 ^㙝 ^㙞 ^㙟 ^㙠 ^㙡 ^㙢 ^㙣 ^㙤 ^㙥 ^㙦 ^㙧 ^㙨 ^㙩 ^㙪 ^㙫 ^㙬 ^㙭 ^㙮 ^㙯 ^㙰 ^㙱 ^㙲 ^㙳 ^㙴 ^㙵 ^㙶 ^㙷 ^㙸 ^㙹 ^㙺 ^㙻 ^㙼 ^㙽 ^㙾 ^㙿 ^㚀 ^㚁 ^㚂 ^㚃 ^㚄 ^㚅 ^㚆 ^㚇 ^㚈 ^㚉 ^㚊 ^㚋 ^㚌 ^㚍 ^㚎 ^㚏 ^㚐 ^㚑 ^㚒 ^㚓 ^㚔 ^㚕 ^㚖 ^㚗 ^㚘 ^㚙 ^㚚 ^㚛 ^㚜 ^㚝 ^㚞 ^㚟 ^㚠 ^㚡 ^㚢 ^㚣 ^㚤 ^㚥 ^㚦 ^㚧 ^㚨 ^㚩 ^㚪 ^㚫 ^㚬 ^㚭 ^㚮 ^㚯 ^㚰 ^㚱 ^㚲 ^㚳 ^㚴 ^㚵 ^㚶 ^㚷 ^㚸 ^㚹 ^㚺 ^㚻 ^㚼 ^㚽 ^㚾 ^㚿 ^㜀 ^㜁 ^㜂 ^㜃 ^㜄 ^㜅 ^㜆 ^㜇 ^㜈 ^㜉 ^㜊 ^㜋 ^㜌 ^㜍 ^㜎 ^㜏 ^㜐 ^㜑 ^㜒 ^㜓 ^㜔 ^㜕 ^㜖 ^㜗 ^㜘 ^㜙 ^㜚 ^㜛 ^㜜 ^㜝 ^㜞 ^㜟 ^㜠 ^㜡 ^㜢 ^㜣 ^㜤 ^㜥 ^㜦 ^㜧 ^㜨 ^㜩 ^㜪 ^㜫 ^㜬 ^㜭 ^㜮 ^㜯 ^㜰 ^㜱 ^㜲 ^㜳 ^㜴 ^㜵 ^㜶 ^㜷 ^㜸 ^㜹 ^㜺 ^㜻 ^㜼 ^㜽 ^㜾 ^㜿 ^㝀 ^㝁 ^㝂 ^㝃 ^㝄 ^㝅 ^㝆 ^㝇 ^㝈 ^㝉 ^㝊 ^㝋 ^㝌 ^㝍 ^㝎 ^㝏 ^㝐 ^㝑 ^㝒 ^㝓 ^㝔 ^㝕 ^㝖 ^㝗 ^㝘 ^㝙 ^㝚 ^㝛 ^㝜 ^㝝 ^㝞 ^㝟 ^㝠 ^㝡 ^㝢 ^㝣 ^㝤 ^㝥 ^㝦 ^㝧 ^㝨 ^㝩 ^㝪 ^㝫 ^㝬 ^㝭 ^㝮 ^㝯 ^㝰 ^㝱 ^㝲 ^㝳 ^㝴 ^㝵 ^㝶 ^㝷 ^㝸 ^㝹 ^㝺 ^㝻 ^㝼 ^㝽 ^㝾 ^㝿 ^㞀 ^㞁 ^㞂 ^㞃 ^㞄 ^㞅 ^㞆 ^㞇 ^㞈 ^㞉 ^㞊 ^㞋 ^㞌 ^㞍 ^㞎 ^㞏 ^㞐 ^㞑 ^㞒 ^㞓 ^㞔 ^㞕 ^㞖 ^㞗 ^㞘 ^㞙 ^㞚 ^㞛 ^㞜 ^㞝 ^㞞 ^㞟 ^㞠 ^㞡 ^㞢 ^㞣 ^㞤 ^㞥 ^㞦 ^㞧 ^㞨 ^㞩 ^㞪 ^㞫 ^㞬 ^㞭 ^㞮 ^㞯 ^㞰 ^㞱 ^㞲 ^㞳 ^㞴 ^㞵 ^㞶 ^㞷 ^㞸 ^㞹 ^㞺 ^㞻 ^㞼 ^㞽 ^㞾 ^㞿 ^㟀 ^㟁 ^㟂 ^㟃 ^㟄 ^㟅 ^㟆 ^㟇 ^㟈 ^㟉 ^㟊 ^㟋 ^㟌 ^㟍 ^㟎 ^㟏 ^㟐 ^㟑 ^㟒 ^㟓 ^㟔 ^㟕 ^㟖 ^㟗 ^㟘 ^㟙 ^㟚 ^㟛 ^㟜 ^㟝 ^㟞 ^㟟 ^㟠 ^㟡 ^㟢 ^㟣 ^㟤 ^㟥 ^㟦 ^㟧 ^㟨 ^㟩 ^㟪 ^㟫 ^㟬 ^㟭 ^㟮 ^㟯 ^㟰 ^㟱 ^㟲 ^㟳 ^㟴 ^㟵 ^㟶 ^㟷 ^㟸 ^㟹 ^㟺 ^㟻 ^㟼 ^㟽 ^㟾 ^㟿 ^㠀 ^㠁 ^㠂 ^㠃 ^㠄 ^㠅 ^㠆 ^㠇 ^㠈 ^㠉 ^㠊 ^㠋 ^㠌 ^㠍 ^㠎 ^㠏 ^㠐 ^㠑 ^㠒 ^㠓 ^㠔 ^㠕 ^㠖 ^㠗 ^㠘 ^㠙 ^㠚 ^㠛 ^㠜 ^㠝 ^㠞 ^㠟 ^㠠 ^㠡 ^㠢 ^㠣 ^㠤 ^㠥 ^㠦 ^㠧 ^㠨 ^㠩 ^㠪 ^㠫 ^㠬 ^㠭 ^㠮 ^㠯 ^㠰 ^㠱 ^㠲 ^㠳 ^㠴 ^㠵 ^㠶 ^㠷 ^㠸 ^㠹 ^㠺 ^㠻 ^㠼 ^㠽 ^㠾 ^㠿 ^㡀 ^㡁 ^㡂 ^㡃 ^㡄 ^㡅 ^㡆 ^㡇 ^㡈 ^㡉 ^㡊 ^㡋 ^㡌 ^㡍 ^㡎 ^㡏 ^㡐 ^㡑 ^㡒 ^㡓 ^㡔 ^㡕 ^㡖 ^㡗 ^㡘 ^㡙 ^㡚 ^㡛 ^㡜 ^㡝 ^㡞 ^㡟 ^㡠 ^㡡 ^㡢 ^㡣 ^㡤 ^㡥 ^㡦 ^㡧 ^㡨 ^㡩 ^㡪 ^㡫 ^㡬 ^㡭 ^㡮 ^㡯 ^㡰 ^㡱 ^㡲 ^㡳 ^㡴 ^㡵 ^㡶 ^㡷 ^㡸 ^㡹 ^㡺 ^㡻 ^㡼 ^㡽 ^㡾 ^㡿 ^㢀 ^㢁 ^㢂 ^㢃 ^㢄 ^㢅 ^㢆 ^㢇 ^㢈 ^㢉 ^㢊 ^㢋 ^㢌 ^㢍 ^㢎 ^㢏 ^㢐 ^㢑 ^㢒 ^㢓 ^㢔 ^㢕 ^㢖 ^㢗 ^㢘 ^㢙 ^㢚 ^㢛 ^㢜 ^㢝 ^㢞 ^㢟 ^㢠 ^㢡 ^㢢 ^㢣 ^㢤 ^㢥 ^㢦 ^㢧 ^㢨 ^㢩 ^㢪 ^㢫 ^㢬 ^㢭 ^㢮 ^㢯 ^㢰 ^㢱 ^㢲 ^㢳 ^㢴 ^㢵 ^㢶 ^㢷 ^㢸 ^㢹 ^㢺 ^㢻 ^㢼 ^㢽 ^㢾

抄』卷九「風は」との関係について論究したのは未だ見られないようである。

宣長が花の中でとりわけ桜を愛したことはよく知られている。今はその証左の一つとして『玉勝間』卷六「花のさだめ」の冒頭を引用するに留めよう。

花のさだめ

花は桜、桜は山桜の、葉あかりて、ほそきが、まばらにまじりて、花しげく咲たるは、又たぐふべき物なく、うき世のものとも思はれず、葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり、大かた山ざくらといふ中にも、しなく有て、こまかに見れば、一木ごとに、いさ、かかはれるところ有て、またく同じきはなきやう也、又今の世に、桐がやつ八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし、すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず、松も何も、あをやかにしげりたるこなたに咲るは、色はえて、ことに見ゆ、空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花とおおえぬまでなん、朝日はさら也、夕ばえも、(後略)

この随筆で宣長は、花の中では桜が最もすばらしい。その桜の中でも山桜が、その若葉が赤く照り映えて、細い葉がまばらに交つて、花がたくさん咲いているのは、比べるものがなく、この世のものは思われないほどすばらしい、と述べている。また、「花のさだめ」もまた、『枕草子春曙抄』の「木の花は」並びに「草の花は」を踏

まえて書かれていることは、一読して明らかである。

このように桜をこよなく愛する宣長が、『玉勝間』に桜をモチーフとした巻名を付けたことは当然のこととして理解できる。しかし、宣長が最も好む桜は「花のさだめ」にあるように、山桜の若葉が輝き、花がたくさん咲き誇るものであった。ところが、『玉勝間』卷二の「桜の落葉」は庭桜で、しかも花ではなく葉であり、更にその葉も落葉である。「桜の落葉」という巻名は、「花のさだめ」に記された彼の桜観からはほど遠く、寧ろ対照的な存在である。

宣長の「花ちりし」の歌の大意は、この庭の桜の花が散った時に物思いをしたが、秋になって、その同じ桜木の梢の紅葉にまた物思いつていることよ、といったところであろう。彼は『玉勝間』卷六「花のさだめ」に記したように、山桜の若葉が照り輝き、その花が咲き誇るのを最も美しいとした。そして、同じく『玉勝間』卷二「桜の落葉」に於いて、そうした宣長の桜観からすると対照的な、庭桜の落葉を取り上げて、その落葉にも「又ものおもふ」と嘆じてみせたのである。

宣長は「花のさだめ」と「桜の落葉」という二作品とともに『枕草子春曙抄』という共通の文学作品を下敷きとし、その上で、春秋の桜を対照的に書き分けることで、自らの桜への強い想いを表現したのではなかったろうか。すなわち、「桜の落葉」と「花のさだめ」は桜というモチーフを描いた一対の作品である、と考えてよいのではないだろうか。なお、「桜の落葉」と「花のさだめ」の執筆時期は、いずれが先行したのか、現在のところそれを確定する資料はな

いが、常識的に考えるならば「花のさだめ」が先行して成立したのではないだろうか。

3 卷三「たちばな」

たちばな 三

立よればむかしのたれと我ながらわが袖あやしたちばなのかげ

これは題よみのすぐることなるを、とり出たるは、ことさらめきて、いかにぞやとおほゆれど、例の巻の名つけむとてなむ、

宣長の「立よれば」の一首を現代語訳すると、橘の木陰に立ち寄ると、その香に我ながら昔の誰とも分らないが、不思議と昔のことを思つて涙ぐまれる、となるであろう。なお、結句の「たちばなのかげ」の用例を『万葉集』と二十一代集に求めたところ、それは次に掲げる、『万葉集』卷二の三方沙弥の一首のみであった。ただし、三方沙弥の歌は恋人に会えない寂しさから思い乱れる心情を詠んだ作品であり、宣長の「立よれば」とは詠まれている心情が相違している。

三方沙弥娶園臣生羽之女未經幾時

臥病作歌

タチバナノカゲフミミチノヤチマタニモノラゾオモワイモニアハズシテ
橘之蔭履路乃八衛尔物乎曾念妹尔不相而

三方沙弥

（『万葉集』卷二相聞、一二五）

宣長は「立よれば」の後に「これは題よみのすぐることなるを、とり出たるは、ことさらめきて、いかにぞやとおほゆれど」と言い訳めいた言葉を添えている。「橘」という題で故人や知己の人を懐かしむ内容を詠んだ歌は、『万葉集』や二十一代集に於いて、確かにしばしば見られるものである。その用例として『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』からそれぞれ一首ずつ掲出すると、次の如くである。

十六年四月五日独居平城故宅作歌

タチバナノニホヘルカガモホトリギスナクヨノアメニウツロヒヌラム
橘乃尔保蔽流香可聞保登等芸須奈久欲乃雨尔宇津路比奴良牟

（『万葉集』卷十七、三九三八）

題しらず

よみ人しらず

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする

（『古今和歌集』卷三夏歌、一三九）

題しらず

皇太后太俊成女

たちばなのにはふあたりのうたたねは夢はむかしの袖のかぞする

（『新古今和歌集』卷三夏歌、二四五）

宣長の「立よれば」の歌は右に掲げた用例から明らかなように「橘」と詠んだ和歌としては伝統的な詠み方である、といつてよいであろう。宣長はそれを謙遜して「すぐること」（取柄のない歌）

と評した。こうした古歌を規範とした詠出態度は、しかし、この「立よれば」に限らず、宣長の和歌全体について言えることでもある。

4 巻四「わすれ草」

わすれ草 四

からぶみの中に、とみにたづぬべき事の有て、思ひめぐらすに、そのふみとばかりは、ほのかにおぼえながら、いづれの巻のあたりといふこと、さらにおぼえねば、たゞ心あてに、こゝ、かしことたづぬれど、え見いせず、さりとていとあまたある巻々を、はじめよりたづねもてゆかむには、いみじくいとまいりぬべければ、さもえ物せず、つひにむなしくしてやみぬるが、いとくちをしきまゝに、思ひつゞけゝる、

ふみ、つる跡もなつ野の忘草老てはいとゞしげりそひつゝ、もとより物おほゆること、いとゞもしかりけるを、此ちかきとしごろとなりては、いとゞ何事も、たゞ今見聞つるをだに、やがてわすれがちなるは、いとゞいふかひなきわざになむ、

漢籍の中に、にわかに探し求めたいことがあつて、いろいろと考えてみるが、その書名だけはぼんやりと覚えているが、その第何巻であつたかはぜんぜん覚えていないので、ただあて推量にちこち探したが見つけることができず、そうかといって大部の巻々を初めから見ていくのは、とても時間がかかることなので、それもできず、

とうとう見つけれないままに止めてしまったことが、とても残念なので、そのことを考え続けた。そして、「ふみ、つる」の一首を詠んだ。私（宣長）は昔から物覚えが悪かったが、近頃ではいよいよ何事も、たつた今見聞きしたことさえもすぐに忘れがちなのは、何とも情けないことよ。「ふみ、つる」の歌の大意は、夏の野原にわすれ草がますます生い茂つて、ここに着くまで私の足跡までも見えなくしてしまうように、年をとると、これまでに読んだたくさん書物のことも忘れることがますます激しくなってきたことよ、といったところであろう。以上が、この巻頭言の通釈である。

宣長がこの巻頭言を書いた時期を確定することはできないが、おそらく彼の六十歳半ば以降であろう。老いを迎えた学者の述懐ともいふべき小品であり、古今を通じて、老学者に広く通じる心情が素直に綴られた文章である。宣長がその青年期に京都に上り、朱子学者の堀景山に師事したことは、彼の『在京日記』や『家のむかし物語』に記されている。宣長は国学者であつたが、彼が漢籍を読むことは特別なことではなく、寧ろしばしばあつたことであろう。巻四の「わすれ草」で宣長は、書名は思い出せたが、それ以上のことが思い出せなかつた書物について、「からぶみ」で、「いとあまたある巻々」と記している。宣長の『在京日記』の記事などから考えると、それは史書では『史記』か『春秋左氏伝』、集書では『文選』あたりではなかつただろうか、と推測されるのである。

伝統的な和歌の世界では、忘れ草に恋愛の憂いを忘れさせる効果を期待したものが多い。例えば『万葉集』と『古今和歌集』には、

次のような和歌が見える。

大伴宿祢家持贈坂上家大嬢歌

萱草 吾下紐尔著有跡鬼乃志許草事二思安利家理
ワスレグサワガシタヒモニツケタレドオニノシゴクサコトニシアリケリ

『万葉集』巻四相聞、七二七

題しらず

よみ人しらず

忘れ草たねとらましを逢ふ事のいとかく難きものとしりせば

『古今和歌集』巻十五恋歌五、七六五

宣長の「ふみ、つる」の歌はこうした伝統的な詠み方とは異なり、老いに伴う物忘れを詠んでいることが注目される。歌人としての宣長は古歌を規範とし、それを駆使することによって古人の風雅と同一化することを喜ぶ趣があった^③。そうした彼が老いに伴う物忘れという現実的な生活感情を和歌で表出することは珍しいといえるだろう。ただし、ここでも宣長はあくまでも古典の表現を用いることを忘れてはいない。彼の「ふみ、つる」の結句の「しげりそひつ、」は、左記の『古今和歌集』収載歌を踏まえて作られた可能性が考えられてよいであろう。

題しらず

よみ人しらず

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢ちにさへやおひしげるらむ
(同右、七六六)

巻五の巻頭言「わすれ草」は全体として具体的な文学作品を下敷

きにした作品ではなく、また、そこに詠まれた「ふみ、つる」の歌も、伝統的な和歌で詠まれる「忘れ草」とは異なり、老いに伴う物忘れという現実的な生活感情を詠んだものである。その意味に於いて本篇は、上述した巻一「初若菜」、巻二「桜の落葉」、巻三「たちばな」の巻頭言とは異なり、古典文学の世界から少し距離を置いた作品に仕上げられている。

5 巻五「枯れ野のすゝき」

枯野のすゝき 五

秋過て、草はみながら、かれはて、さびしき野べに、たゞ尾花のかぎり、心長くのこりて、むら／＼たてるを、あはれと見て、よめる、

かれぬべきかれ野の尾花かれずあるをかれずこそ見めかれぬかぎりは

かゝるすゞろごとをさへに、とり出たるは、みむ人、をこに思ふべけれど、よしやさばれとてなん、

宣長は巻名では「枯野のすゝき」と記し、一方、和歌では「かれ野の尾花」と詠んでいる。『八雲御抄』や『藻塩草』にあるとおり、和歌に於いて「尾花」は「すすき」の異称である。宣長は巻名では「すゝき」を用い、一方、和歌ではそれを「尾花」と置き換えているのである。この置換はしかし、巻頭言を一つの作品として見た場

合、その完成度に大きな欠陥をもたらす結果になっている。この点について以下に詳述してみたい。

まず、巻名に使用された「枯野のすゝき」から考察してみよう。

「枯野のすゝき」の用例を『万葉集』と勅撰集に求めたところ、それは『新古今和歌集』収録の次の西行の和歌一首のみであった。

みちの国へまかりける野中に、めにたつまなる
つかの侍りけるを、問はせ侍りければ、これなん
中将のつかと申すことたへければ、中将とはいづ
れの人ぞととひ侍りたれば、実方朝臣のこととな
む申しけるに、冬のことにて、しもがれのすすき
ほのほの見えわたりて、をりふし物がなしうおほ
え侍りければ

西行法師

くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみ
る

〔『新古今和歌集』巻八哀傷歌、七九三〕

この歌はその詞書にあるとおり、陸奥を訪れた西行が、その旅の途中の野中で、藤原実方の墓とされる塚を見て詠んだ作品である。実方は中古三十六歌仙の一人に数えられる人であったが、陸奥守として辺地で不遇の死を遂げたと伝えられている。一首の大意は、歌人としての実方公の名声は今も朽ちずに伝えられているが、今は枯野のすすきをその形見として見るばかりです、といったところであ

る。なお、この歌は『山家集』と『西行物語』にも収録されており、近世に於いては比較的よく知られた和歌であるといつてよいであろう。ただし、宣長の『新古今集美濃の家づと』（寛政七年刊）は、この歌を取り上げて註釈していない。

さて、『玉勝間』の「枯野のすゝき」の文章には、秋が過ぎて、野原の草はすべて枯れてしまつて、寂しい野辺に尾花だけが、気長に残つて、あちらこちらに群生しているのを、趣深く眺めて詠んだ、と記されている。この宣長の文章は、「枯野のすゝき」という巻名の文学的背景として推定されるところの、『新古今和歌集』収載の西行の「くちもせぬ」の一首に歌われた、藤原実方の塚の辺りの荒涼とした風景を写したようにも見える。ただし、そこには塚は描かれてない。

宣長の「かれぬべき」の歌は、各句の頭に「かれぬ（かれず）」を冠して作られた作品で、音に重点を置いた一種の言葉遊びの様相を呈している。また、第四句の「かれず」は「枯れず」（枯れない）と「離れず」（目を離さない）を掛けた語である。なお、「かれ野の尾花」の用例を『万葉集』と勅撰集に求めたが、それを見出すことはなかった。「かれぬべき」の歌の大意は、枯れるはずの枯野の尾花が枯れないで咲いているので、それが枯れてしまうまでは、目を離さずに見ていよう、といったところであろう。この歌にはしかし、西行の「くちもせぬ」で詠まれた陸奥で不遇の生涯を閉じた歌人、実方に対する追慕の念は見られない。宣長はこの歌の直後に「かゝるすゝるごとをさへに、とり出たるは、みむ人、をこに思ふべけれ

ど、よしやさばれとてなん、」と月並みな謙遜とも、また自己弁解とも、或いは自嘲ともとれる文章を附している。

「枯野のすゝき」という歌語を詠み込んだ『新古今和歌集』収載の西行の「朽もせぬ」の一首は、『新古今和歌集』以外にも『山家集』と『西行物語』にも収録されており、国学者や近世歌人の間では広く知られていたと推測される。ゆえに、「枯野のすゝき」という巻名（歌語）から西行の「くちもせぬ」の歌を連想し、そこに詠まれた不遇の歌人、藤原実方の塚へ手向けられた西行の追慕の念にまで思い至ることは、近世和歌の世界では決して難しい連想ではなかったのではないかと私は考える。そして、こうした私の推測が成り立つならば、『玉勝間』巻五の巻頭言「枯野のすゝき」は、その読者が国学者や歌人であった場合、巻名の「枯野のすゝき」から西行の「くちもせぬ」の一首を想起し、そのイメージでこの巻頭言全体を読み解こうとする可能性が考えられてよいであろう。しかし、こうした読み方は、宣長の「かれぬべき」の一首によって否定される。そして、この巻頭言は西行の「くちもせぬ」の一首とは無関係であり、不特定一般化された秋の野辺のすすきの景色を写した作品と見る方が正しいのではないのか、という読み直しを迫られる結果になるのである。宣長が「かゝるすゝろごとをさへに、とり出たるは、みむ人、をこに思ふべけれど、よしやさばれとてなん、」と記した本篇末の一文は、こうした作品内部に於けるイメージの断絶について、宣長が自覚していたことの表れと見ることはできないだろうか。

宣長は巻五の巻名を自作の和歌から引用して「かれ野の尾花」とすべきであった。そうすれば、彼は作品内部に於けるイメージの断絶という過ちを犯さずに済んだはずである。案ずるに、彼がそうしなかった理由は、歌語としての「かれ野の尾花」の用例が『万葉集』と勅撰集から見出せなかったからであろう。そこで、宣長は「かれ野の尾花」とほぼ同じ意味をもつ歌語として、広く知られた西行の歌から「枯野のすゝき」を採用し、巻名としたのではなかったろうか。勅撰集に使用された歌語を重視する宣長の姿勢は理解できる。しかし、巻名が和歌解釈に及ぼす影響を考えた場合、その選択は最善ではなかったと言わざるを得ないであろう。

6 巻六「からあゐ」

からあゐ 六

おのが哥に、からあゐの末つむ花、よめりければ、ある人、すゑつむ花は、くれなるのそこそよみたれ、からあゐのとはいかず、といへるに、おのれこたへけらく、万葉集の歌に、くれなゐをからあゐともよめり、そもくくれなゐといふは、此物もと呉の国より渡りまうできたるよしにて、呉の藍といふを、つゞめたる名なるを、そは韓国よりつたへつる故に、又韓藍ともいへるなり、といへる説のごとし、但しからといふは、西の方の国々のなべての名なれば、これは呉ノ国をさしていへるにて、呉藍といふと同じことにもあるらし、さるを万葉の十一の巻には、

鶏頭草からあゐとも書るにつきて、鴨頭草つぎくさ也とも、鶏頭花けいとく也ともいふ、説どもの有てまぎらはしきやうなれば、つき草とも、鶏頭草ともいふは、みなひがごとにて、紅花くれなゐなること疑ひなし、さればからあゐすなはち紅花くれなゐなることを、さとしがてら、ことさらにかくはよめるぞ、ついでにいはむ、同七の巻に、

秋さらば移しもせんとわがまきしからあゐの花をたれかつみけん

移すとは、おろして染るをいふ、此ノ移字を、本に影に誤れり、といへりければ、うなづきてやみぬ、其おのが歌は、

からあゐの末摘花の末つひに色には出ん忍びかねてば

寄草恋といふ題にてよめるなり、古今集なる、

我恋をしのびかねてばあしびきの山橘の色に出ぬべし

といふ歌にぞよくになると、又いふ人もありませんか、

『万葉集』に於ける「からあゐ」が鶏頭を指すことは、今日では通説になつてゐるようである。それに対して宣長は、この一篇で「からあゐ」は紅花であると主張する。宣長の説を要約すると、まず『万葉集』に「呉藍」を「からあゐ」と読んだ例があること。そして、「くれなゐ」は「呉の藍（くれのある）」の縮約された語であり、「から」は「西の方の国々のなべての名」でありから、「からあゐ」と「くれなゐ」は同じである。すなわち、「からあゐ」＝「くれなゐ」＝紅花である、というのである。

宣長のこの説は、彼の師である真淵の説を受けたものであると考

えられる。真淵は『万葉集』卷三の三八四番歌を取り上げて、次のように記している。

○山部宿祢赤人哥一首

吾屋戸尔。韓藍カラアキマキオフシ種生之。雖干。不懲而亦毛。将時登曾念。カレスレド

紅花の種子を蒔生せしか、花を得るにも及ばすて枯うせんと思ひし女の、かひなくかれにしに、今にこりずて得んとおもふ、とたとへたる哥なり、韓藍と呉藍は同じけれど、出る地によりてからともくれとも云、別記有、（『万葉考』卷十四）

真淵は韓藍と呉藍は同じものであるが、その産地によつて「から」とも「くれ」とも書くのだと説く。そして、この歌にある「韓藍種」を「紅花の種子」と訳している。真淵もまた、「からあゐ」＝「くれなゐ」＝紅花と考えていたのである。この理解は宣長と同一である。

これに対して契沖は今日の通説通り、「からあゐ」は鶏頭であると考へていた。前掲の赤人の三八四番歌について、契沖は次のように註釈している。

からあゐは鶏頭花なるべし。第十一に、しのひにはこひてしぬともみそのふのカラアゐの花の色に出めやも。此哥に鶏頭草とかきて、哥のをはりに注していはいく。類聚古集云。鴨頭草又作鶏冠草云々。依此義者可和月草歟。しか注したるは、順などの初て和点をくはへられける時、まづ鶏頭花とこゝろえて、からあゐと訓せられたれども、又類聚古集に一説あるによりてそれ

を注せられたる歟。又後の人の、類聚古集を見て注しかへたる歟。類聚古集といふ書、和漢いづれとも、時代いつの比出来りとも、こゝにひける外はきこえぬ書にや。からあるの花の色に

出めやもといへるも、鶏頭花の火よりもあかきによせてはよくきこえ侍り。月草にても色に出といはれしとはあらねと、あゝよりもあをきはすこしかなひかたき歟。第七に、秋さらは陰にもせんとわかまきしからあゝの花を誰かつみけん。第十に、こふる日のけなくあゝはみそのふのからあゝの花の色に出にけり。いづれもおなじ心に聞ゆれば、鶏冠草花とかけるにて、鶏頭花ならんとはおもへり。鶏頭花はことにいろ／＼おほき花なれど、あかき花の鶏冠のなりしたれば鶏頭となづく。清少納言にいへる、雁来花とかきてかまつかといふ花も鶏頭中の一種とみえたり。これもかゝやくばかりなる色なり。和名集云、弁名立成云。紅藍【久礼乃阿井】呉藍【同上】。本朝式云。紅花【俗用之】くれなゐといふは、くれのあるを、乃阿をかへして奈になしてよべば、呉藍なり。紅も物をよくそむる事あるに似て、呉国より出来たれば、青赤色はことなれど、さはなづけたり。此花の色も紅にして、三韓のうちよりつたへきたれば、からあるといふなるべし。^⑥（『万葉代匠記』巻二・初稿本）

契沖は文献としての『類聚古集』の確かさに疑問を呈しながらもそれを引用し、『万葉集』に於ける「からあゝ」の用例を検討した上で、鶏頭の花の赤色が歌の意ともよく通うと説く。そして、鶏頭

の花は紅色で、三韓から伝来したことに因んで「からあゝ」と呼ぶのであると推測している。

このように『玉勝間』巻六「からあゝ」に於ける宣長の主張は、師真淵が『万葉考』で示した見解をほぼ踏襲したものである。宣長は自説が師説と同じであることに心を強くしたのであるうか、『玉勝間』では「さればからあゝすなはち紅花なることを、さとしがてら、ことさらにかくはよめるぞ」と語気を強めている。しかし、繰り返すが、宣長と真淵の説は今日では否定されており、契沖の説が一般的である。

さて、宣長の「からあゝ」の一首を通釈すると、紅色の末摘花の端について色が出てしまうように、私のあなたへの想いはそれを隠そうとしても忍びかねてついに表に出てしまいました、といったところである。宣長はこの一首が『古今和歌集』巻十三に載る、左の紀友則の一首と似ていると指摘する人もいるかもしれないと記している。

題しらず

とのり

わがこひをしのびかねてはあしひきの山橘の色にいでぬべし

（『古今和歌集』巻十三恋歌三、六六八）

友則のこの歌は、隠しきれなくなった恋心の発露を詠んだものであり、歌意の点から観れば宣長の「からあゝ」の歌に通じる。また、「忍びかねてば」（宣長）と「しのびかねて」（友則）、「色にや出ん」（宣長）と「色にいでぬべし」（友則）といった句レベルの表

現にも類似が認められる。更に、末摘花から抽出される染料の紅色（宣長）と山橘の実の赤色（友則）という歌材の色彩にも共通点が認められる。宣長は巻頭言「からある」の末尾に読者から寄せられるであろう批評の一つというかたちで、友則の和歌を引用することで、自作の和歌の見どころ（上記の三点）に気付かせようとしているのではないだろうか。友則の和歌一首を引用すれば、後は筆者が読み解いたように、読者がそれに気付くことはそう難しいことではないはずである。

7 巻七「ふちなみ」

ふちなみ 七

あるところにて、藤の花のいとおもしろく咲りけるを見て、あかずおぼえければ、かへらん人にといふ哥を思ひ出て、

藤の花わが玉のをも松が枝にまつはれてみむ千世の春迄
とよみたるを、そのまたの日、此巻をかくとて、例のなづけつ、

或る所で藤の花がたいへん美しく咲いているのを見て、いつまでも見ていたいと思ったから、「かへらん人」という『古今和歌集』収載歌を思い出して、「藤の花」の一首を詠んだのを、その翌日、この巻を書くので、例によってそれを巻名とした。宣長の詠んだ和歌の大意は、藤の花よ、私の命もお前が今絡み付いている松の枝に纏いついて、いつまでもお前の美しい姿を見ていたい、といったと

ころであろう。

宣長がこの巻頭言で取り上げた「かへらん人」といふ哥は、『古今和歌集』巻二に載る遍昭の次の一首である。

しがよりかへりけるをうなどもの花山にいりて
ふぢの花のもとにたちよりてかへりけるに、よ
みおくりける

僧正遍昭

よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよえだはをるとも

（『古今和歌集』巻二春歌下、一一九）

詞書によると、志賀寺から帰ってきた女たちが、遍昭が住む花山寺を訪れて、その境内にあった藤の花に立ち寄っただけで帰ろうとした時に送った歌であるという。遍昭の「よそに見て」の大意は、藤の花をよそよそしく見てすぐに帰るような人に、藤の花よ、その長い蔓で絡み付いてやれ、たとえその枝が折れようとも、といったところである。因みに、宣長は『古今和歌集遠鏡』巻二で、この和歌を取り上げて「チョットヨツタバカリデ足モ留メズ、ヨソニ見テイヌル人ニ、ハヒマツウテイナスナ藤ノ花ヨ、タトヒ枝ハ折レルトモ、ドウゾハヒマツウテトメヨ」という口語訳を作っている。宣長がいう「ハヒマツウテ」は「絡み付いて」という意味である。

宣長の『石上稿』十七（「寛政四年壬子詠草」）には、本稿で考察している「藤の花」の歌と同じく、前掲の遍昭の「よそに見て」

に拠って詠まれたと考えられる和歌が収載されているので、それを左に引く。

同廿三日、植松有信家にてわかれの会兼題 藤

よそに見てかへるかほせむ藤の花はひまつはれはをりもとるかな

松にさく藤のしなひの長き日を見るにか、りてくらす大本

寛政四年（一七九二）三月五日、宣長は嗣子春庭を伴って名古屋に向かった。宣長一行は同月七日に名古屋に到着し、鈴屋門人の植松有信宅を宿とした。そして、同月二十三日に有信宅を出立するに際して別れの歌会を開き、その時の兼題「藤」の歌として、宣長が詠ったものが右の二首である。その第一首目は明らかに遍昭の「よそに見て」を踏まえた歌である。宣長の「よそにみて」の歌は、よそ目にちらとだけ見て帰るような顔をしてみよう、そうすれば藤の花がその蔓を伸ばして私に纏わり付いてまた戻って来られるかもしれない、といったところであろう。遍昭の「よそに見て」の歌を踏まえて、それを逆手に取ったような歌である。

宣長の『著述上木覚』に拠ると、『玉勝間』巻七の板下が完成したのは、寛政七年（一七九五）十一月であった。とすると、巻七の巻頭言「ふちなみ」が書かれたのも、寛政七年（一七九五）十一月以前と推定される。因みに寛政七年は、宣長は六十六歳である。寛政四年（一七九二）三月二十三日に開かれた有信宅での別れの歌会で、宣長は「藤」という兼題で遍昭の「よそに見て」の歌を踏まえ

た和歌を詠んだ。そして、同七年（一七九五）十一月以前に成稿したであろう『玉勝間』巻七の巻頭言「ふちなみ」に於いても、遍昭の「よそに見て」に拠った和歌を作っている。こうした状況から見ても、寛政年間中頃の宣長が、「藤」を詠んだ和歌の中では、『古今和歌集』収載の遍昭の「よそに見て」の歌を高く評価していたのではなかったか、ということが推測される。

宣長が『万葉集』及び二十一代集の中から選出した歌、宣長が高く評価した歌を収録した『古今選』には、遍昭の「よそに見て」の一首は収録されていない。『古今選』はしかし、宝暦八年（一七五八、宣長二十九歳）三月二十二日に脱稿したアンソロジーであり、青年期の宣長の和歌観が反映されたものである。一方の『玉勝間』巻七の巻頭言「ふちなみ」は、寛政期中頃の作と推定される。謂わば宣長の晩年期の著作である。そこには「藤」を詠んだ和歌では、遍昭の「よそに見て」を高く評価する宣長の姿を窺うことができる。彼はその青年期に於いてはあまり評価しなかった遍昭の「よそに見て」の一首を、その晩年に至って評価するに至ったものではなかったろうか。巻七の巻頭言「ふちなみ」は、こうした宣長の和歌観の変化を窺い知ることができる一篇としても注目される。

最後に、巻名に使われている「ふちなみ」について述べておきたい。「ふちなみ」は『万葉集』及び二十一代集に散見される語であり、巻名「ふちなみ」の典拠を特定することは難しい。また、巻頭言の「ふちなみ」の読解にその巻名である「ふちなみ」の典拠を知ることが不可欠と言うわけでもない。ゆえに、殊更にその典拠を穿

鑿する必要はないが、宣長の巻頭言「ふぢなみ」で取り上げられている『古今和歌集』収載の遍昭の「よそにみて」の次に置かれた、凡河内躬恒の歌に「ふぢなみ」が詠まれていることは注目してよいであろう。参考までに躬恒のその歌を左に掲出しておく。

家のふちの花のさけりけるを、人のたちとまりて

見けるをよめる

みつね

わがやどにさける藤波たちかへりすぎかてにのみ人の見るらむ

（『古今和歌集』巻二春歌下、一二〇）

〈注〉

① 『枕草子春曙抄 下』一三〇～一三一ページ。北村季吟古註釈集成四、新典社、昭和五十二年一月刊。

② 『本居宣長全集』第十五巻解題九ページ参照。

③ 同右参照。

④ 『時代別国語辞典 上代編』（三省堂、平成四年一〇月刊）と松田修『古典植物辞典』（講談社学術文庫）はともに、「からある」は鶏頭のことであると記している。また、片岡智子「歌語「からある」考——紅花と鶏頭の花の叙述——」（『ノートルダム清心女子大学紀要』第三一巻一号、平成一九年刊）も「からある」は鶏頭であると見る。

⑤ 『賀茂真淵全集』第四巻二七八ページ、続群書類従完成会、昭和五十八年八月刊。

⑥ 『契沖全集』第二巻一五六～一五七ページ、岩波書店、昭和四

十八年六月刊。

〈付記〉

本稿に於ける宣長の著作からの引用は全て筑摩書房版『本居宣長全集』に拠った。また、『万葉集』及び二十一代集は『新編国歌大観』から引用した。